10 月第 2 週の礼拝説教

■日　時：2023 年 10 月 8 日（日）10：30－11：30　聖霊降臨節第 20 主日
■説　教：　保科けい子牧師
■説教題：「　力ある神の子　」
■聖　書　新約：ローマの信徒への手紙 1 章 1～7 節（新約 p273）
■讃美歌：19「　み栄え告げる歌は　」
　　456「　わが魂を　愛するイエスよ」

先週の火曜日あたりから急に涼しくなりました。やっと秋らしくなってきましたが、急激な気温差であまり体調がよくない方もおられることでしょう。そして、気が付けば１０月も一週間を過ぎていました。本日の週報の「牧師室より」にもまた記しておきましたが、10 月の主日礼拝は、ローマの信徒への手紙の 1 章の前半をご一緒に読みたいと考えています。先週の話の繰り返しになりますが、一年のうち今の時期ぐらいは、私たちプロテスタント教会の始まりである 16 世紀に起こった宗教改革について思いを新たにしたいと思います。

先週は、ローマの信徒への手紙の 1 章 1 節と 7 節を見比べながら、著者である使徒パウロと手紙の宛先であるローマの教会に集っている人々が、互いに「わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。」と祈りあう関係が生じているのではないか、ということについてお話ししました。そして本日は、パウロが「神の福音のために選び出され、召されて使徒となった」者だと自己紹介した後で、すぐに 2 節で「この福音は」と彼自身の福音についての思いを力強く語り出している「福音」の内容について、共に考えてまいりましょう。彼は、もともとは主イエスを信じる人々を迫害していたのですから、使徒となる資格はなかったはずです。パウロ自身がコリントの信徒への手紙一の 15 章 9 節で「わたしは、神の教会を迫害したのですから、使徒たちの中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です」と言っています。しかし、そのようなパウロに、復活なさった主イエスがご自身のほうから出会って下さり、彼を召して、キリストによる救いを宣べ伝える者として派遣なさったのです。ですから、その彼が宣べ伝えている福音は、彼の本当の命を救った「良い知らせ」と言えるでしょう。それが棒線で囲まれている 2 節から 6 節に記されています。この箇所を読むと、旧新約聖書の内容を最も簡潔にまとめているということが見えてきます。

さて、2 節に先ず語られているのは、「この福音は、神が既に聖書の中で預言者を通して約束されたもので」ということです。彼が宣べ伝えている福音は、神が既に旧約聖

書の中で、預言者を通して約束として語っておられたもので、それが実現したということなのだ、とパウロは言っているのです。つまり、旧約聖書に既に語られていた救いの約束がイエス・キリストによって実現した、それが福音であると語っているのです。その福音は「**御子に関するものです**」と3節にあります。そのイエス・キリストは「**御子**」、つまり「**神の子**」であり、福音は御子イエス・キリストによって実現した救いの知らせである、ということです。そしてその後3、4節は、「**御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。この方が、わたしたちの主イエス・キリストです。**」と続いていきます。主イエス・キリストが御子、神の子であられるとはどういうことか、ということが、これ以上絞り込めないほどにポイントを押さえてここに語られているのです。

ところで、ヨハネによる福音書1章14節には、天地の造り主でありまことの神である「言」が肉となって、つまり本質において神であられる主イエスが私たちと同じ人間となり、肉体をもってこの世に生まれて下さった、そこにまさに喜びの知らせである福音があることが語られています。そして、本日の箇所ローマの信徒への手紙1章4節では、その御子は、「**聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められた**」と語られています。これは、イエスという人間が死者の中から復活して神の子となったと言っているのではありません。そうではなく、もともと神の子である主イエスが死者の中から復活されることによって「力ある神の子」であることが明らかになり、改めてそのように定められた、と語っているのです。主イエスの神の子としての力、つまり私たちを救って下さる力は、死者の中からの復活によってこそ示され、明らかにされたのです。その力とは、死に勝利する力です。ご自分の復活の命に私たちをも与らせて下さり、私たちにも、死に勝利する復活の命を与えて下さる力です。肉体をもってこの世を生きている私たちは、どんなに充実した実りある人生であっても、その終わりの死の支配から逃れることができません。そして、死が私たちを脅かす恐ろしい力であるのは私たちに罪があるためである、と聖書は語っています。その罪というのは、私たちが様々な悪いことをしているということよりも、もっと根本的なところで、私たちに命を与え人生を導きそれを取り去られる神との間の良い関係が失われていることです。神を神として敬い、感謝し、礼拝するのでなく、自分の人生の主人は自分自身であると思って生きている私たちは、神との正しい関係を失っているのです。しかし、神の子である主イエス・キリストは、私たちと同じ肉体を持った一人の人間となって下さり、私たちの罪を全て背負って十字架にかかって死んで下さいました。主イエスの十字架の死による罪の赦しの恵みを受けた私たちは、主イエスと同じ神の子とされ、神との良い関係を回復されたのです。そして主イエスが復活して下さったことによって、私たちにも、肉体の死を越えた先に与えられる新しい命、復活と永遠の命の約束が与えられたのです。主イエスの十字架の死と復活によって、力ある神の子イエス・キリストによる救いが実

現したのです。これが、パウロがこの手紙で語っていく福音の中心です。

　パウロは、この福音のために選び出され、召されて使徒となりました。パウロが、神から全権を託された使徒として語っているその福音を、私たちはこの手紙において読むことができます。私はローマの信徒への手紙を読むたびに、この手紙は「パウロによる福音書」とも言えるのではないか、と思いながら読んでいます。私たちも、力ある神の子イエス・キリストによる神の愛にしっかりと捉えられて生きる者とされるのです。そこから私たち一人ひとりもまた、主イエス・キリストの福音を宣べ伝えるものとして召され、遣わされていくのではないかと思います。その中でも特別に「伝道献身者」として召された神学生を祈りのうちに覚えるのが、本日の「神学校日」です。共に祈りましょう。